

形式名詞の無助詞用法

パリハワダナ ルチラ（京都大学）

1. はじめに

形式名詞、すなわち、実質的な意味が稀薄化し、代わりに文法的な機能を獲得した名詞が無助詞の形で、あるいは助詞を伴って接続助詞的に機能する。寺村(1992:298)⁽¹⁾ はこのような形式名詞の接続助詞化について、連体修飾節の被修飾名詞の中に「本来副詞的な要素を含んでいるものがあるとき、その副詞性を利用して、前接する修飾節もろとも副詞節つまり連用修飾節として後の(主)節にかからせる」働きであると述べている。

接続助詞化が頻繁に見られるのは、助詞「に」が形式名詞に後接するときであるが、「で」、「を」、「が」「から」「へ」「の」を伴った形式名詞の接続助詞化も見られる。これらの助詞の本来の機能は、名詞句と述語動詞などの文中の他の要素との関りを示すことであり、それ故、形式名詞の接続助詞化の際にそれらの果たす役割が重要であると想定できる。そのことは、寺村(1992:307)が、助詞「で」の助けをかりて接続助詞化する名詞として「おかげ」、「せい」、「うえ」を位置付けていることから窺われる。

一方、このような助詞の助けのない無助詞用法は「形式化」すなわち、脱実質名詞化が一段と進んだ場合に見られる現象であると推察可能である。しかしながら、形式名詞の無助詞用法の実態に焦点を当てた研究は管見の限り見られない。ゆえに、本研究は形式名詞の無助詞用法を考察対象としながら、その機能を明らかにすることを目的とする。

以下の第2節では、助詞の有無による相違について考察し、第3節では無助詞形の出現状況について検討する。

2. 助詞の有無による相違

形式名詞が助詞を伴って現れる場合と無助詞の形で出現する場合とでは異なる機能を担うことがある⁽²⁾。その例として「あいだ」「うち」「通り」が挙げられる。以下では、全体と部分の表し分け、作用域内外の表示、並びに概数的な量や凡その程度の表現に大別して考察する。

2.1 全体と部分の表し分け

2.1.1 期間全体の表現

時間を表す形式名詞「あいだ」の無助詞用法は、主節の事態が「あいだ」の表す期間全体において継続したことを表す(例1)⁽³⁾。一方、例2が示している通り、「あいだに」の形で、助詞「に」を伴って現れる用法では、主節の成立が従属節の期間内に起きるものとして描写される(寺村1992:141、笠松他1993:144、工藤1995:246)。

(1) わたしにとってとうてい無関心ではいられないこの謎を解こうとしながら、たっぷり

一時間のあいだ、こうした思いにふけていた。(LBt9_00209)

(2) さあ、待ってるあいだになにか食べましょ。(LBt9_00262)

後者において主節の出来事と従属節の出来事が部分的に重なっている。このような部分的同時性の解釈は助詞「に」の成立時点を限定する機能によるものであり、従属節と主節の接続の仕方の決定に助詞が重要な役割を果たしていることを示している。ゆえに、「に」のように一時点への限定の機能を持たない「が」や「は」を伴う「あいだ」は述語の出来事の成立時間として期間全体を表す(例 3)⁽⁴⁾。

(3) またランチタイム(午前十一時～十二時)とディナータイム(午後五時～閉店)の間が
時間的にあいていたが、休憩はなく、バーも開店と同時に営業していたという。
(LBt7_00035)

森田(1989:16-20)が指摘しているように「あいだ」の範囲限定には二パターンがあり、その一つは例 3 のように二つの基準点に挟まれた範囲としての捉え方であり、もう一つは例 1、2 のようにある一つの状態が続いている範囲としての捉え方である。期間全体を捉える無助詞用法が見られるのは後者においてのみである。後者における範囲の把握は、一体としてのものであるからであると推察される。

以上の考察から明らかとなり、助詞「に」を伴った「あいだに」は主節の出来事の生起する時間帯を表すのみならず、助詞「に」の本来の機能を生かしつつ、主節の出来事を該当の時間帯内の任意の一時点、または一部分に限定する役割も果たしている。一方、無助詞の「あいだ」は主節が生起する時間枠として範囲全体を示す機能を果たす。すなわち、助詞の有無により、述語の出来事の時間限定の仕方が異なるのである。

2.1.2 全体における部分の位置づけ

形式名詞「うち」の無助詞用法にも、助詞を伴った「うちに」にはない例 4 のような独自の用法が見られる。

(4) リユースでは、四十四の飲食店のうち8店舗が、新たに開発された生分解性プラスチック製リターナブル食器を使用しました。(OW6X_00037)

例 4 が示している通り、この用法では、範囲全体から一部分が限定される。例 4 では「四十四の飲食店」は範囲全体であり、「8 店舗」はその中の該当部分である。範囲全体を指す表現に後接する無助詞の「うち」は、その全体の中に内包される該当部分を限定している。述語の事態は規定された部分的範囲内に限定される。

それに対して、主節の出来事が従属節の可変的な事態の成立期間以内に生起する(のが望ましい)ことを述べる用法(例 5)では形式名詞「うち」が助詞「に」を伴って出現する。同様に、従属節の出来事が反復される期間中に(例 6)、あるいは生起している期間中に(例 7)、主節の出来事が自ずと発生することを表す用法の「うち」も助詞「に」を伴う。一方、主節の出来事が発生する時間状況を設定する従属節の「うち」は例 8 のように無助詞として出現することもできる。このように、無助詞の「うち」と比べると、「うちに」の方が主節との、時間的条件付けなどの関りを表していると判断できる。

- (5) 語学の習得は若ければ若いほど早いから、留学もなるべく若いうちにするのが望ましい、という説があります。(LBm3_00098)
- (6) 「ダメなことはないよ。練習しているうちにきっと打てるようになるから、うちにも一台、買ってほしい」(LBk2_00044)
- (7) さらに体ごと目のものに投じているうちに、自分を忘れてしまうところまでいくと、そう、無心という境地に入ります。(PB11_00013)
- (8) 水鳥などわずかな色彩は、かえて雪の白さを強調する。でもじっと眺めているうち、怖いと感じ始めた。(PN2b_00002)

2.2 作用域の内外の表示

助詞の有無による用法の違いが形式名詞「とおり」においても見られる。「とおり」が否定述語と共起する際に、否定の作用域内外の区別は助詞「に」の有無によって示される。以下の例 9 は「～通りに」節が接辞否定の作用域内に入るものであるが、対する例 10 の「とおり」節は否定の作用域外に置かれている。つまり、「に」を伴った場合に連体修飾節の動作の様態が否定の作用を受けるのに対して、無助詞用法では、否定の作用を受けるのは主節の事態のみである。そのことは無助詞用法の「とおり」節が主節から独立していることを示している。

- (9) 仕様の変更等により、解説する手順通りに操作できないこともあります。(LBsn_00011)

- (10) 彼女がいったとおり鍵はかかっていなかった。(LBh9_00104)

肯定述語の場合も、「に」を伴う「とおり」節は、主節の事態を修飾し、そのあり方を描写する(例 11)。一方、無助詞の「とおり」節は、主節の事態にかからずに、例 12、13 のように、従属節内に留まりつつ、従属節の事態を描写する。

- (11) 「だから、おれは、あなたの言う通りに従ってきたじゃないか」(LBo9_00226)

- (12) トムがいうとおり、カワウソはおぼれて息をしなくなっていた。(LBkn_00023)

- (13) 湖上は風もなく、穏やかにみえたが、なにしろ湖といっても東西八、九里、南北十九里という大きさと、昔から遭難する舟も少なくないと聞いているので、新八郎は治助のいう通り、陸路をたどった。(PB19_00552)

森山(2013:186)は「言う通り(に)」を例に、「彼が言う通り、私は反対している」を注釈的な用法として、「彼が言う通りに、私は反対している」を動詞修飾的な用法として位置づけている。

なお、目的を表す形式名詞「よう」には、「とおり」と異なり、無助詞用法が見られない。Kato(1985:191)が指摘している通り、助詞「に」を伴って目的を表す「ように」節は否定の作用域外に置かれる(「子供を起こさないように大きな声で話さなかった」)。

2.3 概数的な量や凡その程度の表現

形式名詞「ほど」の数量を概数的に示す用法は無助詞の形で表現される(例 14)。スケールの任意の点の前後を含めた概数的な位置づけである。「三時間」のような数量的な表現はそもそも無助詞の形で述語動詞の前に現れるが、その数量的な表現に「ほど」が後接し、概数的な量であ

ることを示す際も助詞を伴わない。スケールの限界点などを例示する例 15 の程度を表す用法でも「ほど」は同様に無助詞の形で現れる。「～死ぬ」のような動詞節が述語の動詞に直接かかることができない故、動詞節と動詞述語の接続は「ほど」が担っていると判断可能である。上述のような量や程度を表す「ほど」が「に」を伴って現れることができない理由は、2.1.1 で考察したように、格助詞「に」による承接は、限定の意味を伴うからであると考えられる。

一方、限度を表す用法では、「程がある」という形で助詞「が」を伴って出現する(例 16)。その際に許容される範囲の限界点としてスケールの上限が示される。「ほどがある」はコロケーション化した表現であるが、名詞としての接続であり、残されている「ほど」の名詞性を示す用法であると言える。

(14) 「ここまで来るには三時間ほどかかります。」(LBg9_00006)

(15) 「僕は疲れましたよ。生きている連中がよく言うように、死ぬほど疲れました」と彼は遺書に書く。(LBp3_00157)

(16) 敵に塩を送るところか、敵を相手に商売しようとは、図々しいにもほどがある。(LBi9_00188)

以上見てきたように、形式名詞の無助詞用法における述語との関りは以下のように表現される。

- ・述語の出来事が形式名詞「あいだ」の表す期間全体において生起することを表現
- ・無助詞用法の形式名詞「とおり」は述語動詞の作用域の外に置かれるため、述語の事態の方法、あり方、様態に触れない。むしろ、従属節の事態のあり方を規定しながら、それと主節の事態の一致を表現する。
- ・形式名詞「ほど」は述語の事態の概数的量やその実現の程度を例示する役割果たしつつ、述語の事態に対して副詞的に機能する。

3. 無助詞形の出現状況

本節では、無助詞形が出現する文中の位置について、述語として事実的事態をとる従属節を伴う場合、副詞化した表現を伴う場合、一語化した表現を伴う場合、更には硬い文体に出現する場合に大別し、考察する。

3.1 述語として事実的事態をとる従属節を伴う場合

形式名詞「ために」の無助詞形の出現率は原因・理由用法において最も多く見られる⁽⁵⁾(例 17)。

(17) ところが、東京の業者がシカの肉を缶詰にしてもうけようと目論見、シカを大量に捕らえたため、エゾオオカミは食べるものがなくなり絶滅してしまったのです。(PB24_00012)

(18) 正確に大量の情報を顧客に伝えるためにビデオを活用して、インターネットで流している。(PB13_00021)

「ため(に)」節の事態が未完了で意志的なものでなければならない目的用法(例 18)と異なり、因果の認知において主節の事態の把握は事実的で既に成立した従属節の事態を手掛かりとしてなされる(例 17)。故に、前件の事態の独立度が相対的に高く、無助詞の形が好まれると判断可能である。

形式名詞「ところ」にも同様の事実的な用法がある。無助詞用法に限定される「V たところ～」の場合も、後件の把握の手掛かりとなる「ところ」節の事態が既に成立したものであり、独立度が高い(例 19)。

(19) わけを話して相談したところ、「どうぞ会館にお越し下さい」と京都の裏千家の会館に呼ばれたのです。(LBk6_00019)

一方、例 20 の「お忙しいところ」の場合、無助詞の形でも、助詞「を」伴う形でもどちらも許容されるが、無助詞用法の独立性により生じる節間の断絶は、事態の進展が妨げられた(寺村 1992:333)という意味を強める役割を果たすと判断できる。

(20) きょうはお忙しいところおいでいただきまして、心から感謝申し上げます。(OM61_00001)

(21) ばかなことを、いいあっているところに、捜査一課の課長がやってきた。(LBin_00017)

それに対して助詞「に」を伴って現れる従属節の「ところ」は主節の生起する状況などを表現するが、主節の述語との結合度が相対的に高いと考えられる(例 21)。

以上見てきた通り、従属節の事態が事実的な事態である際に、主節への従属度が低く、無助詞形でその独立度が表現される⁽⁶⁾。

3.2 副詞化した表現を伴う場合

形式名詞「うち」が出現する表現に副詞化した「そのうち」がある。「そのうち」は無助詞の形でも(例 22)、「に」を伴ってでも(例 23)文に現れることができる。「に」を伴う「そのうちに」はより一時点に縛られている。しかし、「そのうち」は「近いうち」「近日中」といった不定の時間を表す故、具体的な一時点に縛られずに、無助詞の形で副詞的に述語の事態にかかるようになったと想定できる。このように無助詞化は「そのうち」の副詞化が進んでいることの証として捉えられる⁽⁷⁾。

(22) 「ま、いっか。そのうちできるようになってくれたら、うれしいけど…」(PB46_00126)

(23) 「小さいうちから聞いていたら、もしかしたら、そのうちにわかるようになるかもしれないでしょ、だからなのよ」(PB19_00228)

3.3 一語化した表現を伴う場合

形式名詞「頃」は無助詞の形で文に出現することが最も多い(前田 2012:7)。とりわけ例 24 のように先行する要素と一語化する際に無助詞の形で文に現れる。例 24 から示唆されるようにこのような「頃」は接続助詞というよりも状況語として機能している。そのことは、仁田(2002:207-229)では一部の用法を除いた「ころ」が「時の状況成分」として位置づけられていることか

らも窺える。

- (24) アメリカでは、統計学的に二千一年の七月頃、おそらく人口の十四％が六十五歳以上になると予想しました。(PB25_00406)

上記の例の「頃」は期間を表しているが、岡崎(2018:81-83)が指摘しているとおり、「頃」には接辞的に時点を表す用法がある。助詞「に」は一時点への限定の役割を担うため、時点を表す用法において、一語化した形式でも「に」を伴って現れることがある(例 25)。また、例 25 のように述語動詞が変化を表す「なる」である際も「頃」は「に」を伴って現れる傾向が見られる。一方、時点を表す語であっても、無助詞の形で出現する一語化した例 26 のような場合もある。

- (25) 今朝、午前6時二十五分頃に日が明るくなった。(OY03_11823)

- (26) この頃から高齢者福祉と高齢者環境の整備に政策の重点を移動する準備をしておけば、今頃慌てなくて済んだのかもしれない。(OB5X_00137)

形式名詞「あいだ」の一語化した形式に「こないだ」がある。「こないだ」に「まで」「から」は後接できるが、基本的に例 27 のように無助詞の形で現れる。一語化したこの形式では「あいだ」の期間的な意味が薄れ、「先日」「近ごろ」といった意味を表す。

- (27) 「あっ、それ、こないだもらった方です。返してください！ こっちです、こっち」 あわてた相手は、くるみに別の名刺をにぎらせました。(LBb9_00036)

3.4 硬い文体に出現する場合

3.1 で述べた通り、原因・理由を表す「ため」は無助詞の形で現れることが最も一般的である。「ため」の原因を表す用法は文章語などの硬い文体において見られることが多い(例 28)。

- (28) さらに、調査過程の公表を通じて被害者救済を図るべきだとしているが、公表は必然的にメディアに対する制裁の性格を帯びるため、行政による報道への不当な干渉につながりかねない。(PN1b_00016)

一方、前述の通り、目的を表す用法の「ため」は「に」を伴って出現することが最も多い。しかし、無助詞の形で現れる場合もあり、その際も硬い文体において見られる(例 29)。

- (29) 近畿日本鉄道の定時株主総会では、グループ企業の資金管理を一元化するため、「金融業」を事業項目に追加する定款変更議案が承認された。(PN1d_00021)

同様に形式名詞「よう」も硬い文体では、より改まった表現として無助詞の形で出現する(例 30)。

- (30) また、お年寄り、体のご不自由な方には席をお譲りくださいますようお願いいたします。(LBp0_00016)

- (31) 久保田真苗君ぜひそのようにお願いします。(OM46_00002)

以上見てきたように、従属節の独立の度合い、形式名詞表現の副詞化の度合い、並びに形式名詞表現の一語化の度合いが相対的に高い場合において無助詞形が出現する。更に、硬い文体においても無助詞形が好まれる傾向が見られる。

4. おわりに

形式名詞の無助詞用法は助詞の単なる省略形ではない。無助詞であることの特徴を生かした独自の機能を獲得した用法であると結論付けられる。

その機能の一つは部分に対する全体の表示である。同様に全体における部分の位置づけもその働きとして挙げられる⁽⁸⁾。これらにおける〈全体〉は限定を受けないある範囲の全域を意味する。同様に、一時点に限定されない概数的量や凡その程度の表現も無助詞の形をとる。更に、否定の作用域外であることの表示も無助詞用法の役割の一つであり、無助詞形の出現により述語の縛りから解放されていることが示唆される。

無助詞用法は形式名詞の副詞化の度合いや一語化の度合いを示すバロメーターであることも示された。

無助詞用法は脱名詞化の証として捉えられるが、本研究ではその度合いについて考察できなかった。その上、本研究では形式名詞の無助詞用法を網羅的に扱うことができなかった。それらについての詳細な検討は今後の課題としたい。

注

(1) 再録版より引用

(2) 刈宿(2014:148)は助詞を使った場合と使わない場合とで意味が変わる実質名詞を「無助詞名詞」と呼び、助詞を使っても使わなくても意味が変わらない実質名詞を「助詞省略名詞」と呼んでいる。一方、加藤(2003:335-347)は、助詞があって然るべき位置に助詞を欠くことを「無助詞」と呼び、本来助詞出現可能な位置で助詞が欠落している無助詞は「ゼロ助詞」として扱っている。

(3) 「あいだ」の無助詞用法は「しばらくの間」「長い間」などの形でも見られる。なお、空間を表す「あいだ」は助詞を伴って現れることが一般的であるが、以下のような無助詞の場合も見られる。

パトロールのお兄さんがディレクターの指示でいろいろな滑りをしたのですが、木々の間数十cmをすり抜けて十m以上ジャンプして着地したときには、さすがに驚きました。(PM51_00122)

(4) 「あいだ中」「あいだずっと」などの語彙的手段により期間全体を表すこともできる。

(5) 「ため(に)」の用法別に助詞の有無を調べたところ、原因・理由を表す例 251 中 205 は無助詞の形で出現していることがわかった。一方、目的を表す用法においては、「ため」が助詞「に」を伴って現れることが最も多く、無助詞の形は 273 例中 74 例のみであった。利益用法に至っては無助詞の形は 1 例しか見られなかった。

(6) なお、形式名詞「ほど」の場合、程度を例示する「ほど」の従属節は単なる例示である時もあれば(「死ぬほど苦しかった」(LBc9_00114))、事実的な事態を表す時もある(「ルイもなにがなし感動を覚えて、手が痛くなるほど拍手を送った。」(LBm9_0015))が、いずれも無助詞の形をとる。その上、事実的であると想定可能な際にも、動詞のスル形で表現され、表現機能として例示を表す。

- (7)「そうこうしている間」の意味を表す「そのうち」も助詞「に」を伴って現れることもあれば、無助詞の形で出現することもある(『日本国語大辞典(第二版)』)。
- (8)〈全体〉・〈部分〉はイメージ・スキーマの一種である(Johnson 1990:126)。イメージ・スキーマとは人間の行動、知覚や概念を体系的に捉えることを可能にするパターン化・規則化された認知図式である。

参考文献

- 岡崎友子(2018)『『頃』の用法と歴史的変化—現代語・中古語を中心に—』藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』和泉書院, 75-102.
- 加藤重弘(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 笠松郁子・菅原厚子・鈴木美都代・登野城ルリ子 (1993)「同時性をあらわす時間的なつきそい・あわせ文—『あいだ』と『うち』—」言語学研究会(編)『ことばの科学』6:141-177, 東京:むぎ書房.
- 刈宿紀子(2014)『『無助詞』研究の現状と課題』『学術研究 : 人文科学・社会科学編』62:147-162.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京:ひつじ書房.
- 寺村秀夫(1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その 4—」,『日本語・日本文化』7, 再録版:寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I—日本語文法偏—』くろしお出版.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版.
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 前田直子(2012)「時間節および時間句『時』『頃』の用法」『学習院大学文学部研究年報』58:1-12.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』180-186, 東京:角川書店.
- 森山卓郎(2013)「同一性を表す形式名詞『通り』について」, 藤田保幸編『形式語研究論集』177-188 和泉書院.
- Johnson, M.(1990) *The Body in the Mind*, The University of Chicago Press.
- Kato, Y.(1985) *Negative Sentences in Japanese*, Sophia Linguistica 10.

その他の資料

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ):
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編(2000-2002)『日本国語大辞典(第二版)』東京:小学館.